

ていた三層の楼閣で、鶴雀樓ともしるす

## 『登 鶴 鵠 樓』 王 之 漢

詩は知られ人は知られず

白 日 太陽

千里目 千里の彼方まで見通せる眺望

### 【鑑 賞】

登 鶴 鵠 樓 王 之 漢 鶴 鵠 樓 に 登 る 王 之 漢

白 日 依 山 盡  
白 日 山 に 依 つ て 尽 き

黃 河 入 海 流  
黃 河 海 に 入 つ て 流 る

欲 窮 千 里 目  
千 里 の 目 を 窮 め ん と 欲 し て

更 上 一 層 樓  
更 に 上 る 一 層 の 樓

この詩は起句と承句が対句となり、転句と結句が流水対となつてゐる珍しい全対格を形成している。

詩の内容は、起句・承句で目に映る光景をそのまま詠ずるだけでなく目には見えない西の果て、東の果てを想像した、実際の景色よりもっとスケールの大きな句として読みとることができる。更に時間の観念が加わった氣宇壮大な世界の拡がりが感じられる。

転句、結句になると、果てしなく広大に拡がる世界を実際に見ようとして、もう一層上に登ろうといふのである。頭の中で思い描いた世界をこの目で確かめ、自分の知覚で認識の中に収めて、世界をまるごと自分のものにしようとする人間の精神の力強さが、ここに表現されている。

唐王朝が内外にその力をみなぎらせた盛唐という時期が詩人の精神にも及んでおり、この詩が長く愛誦されてきたのは、そうした力強さに満ちているからなのであらう。

### 【詩の意味】

鶴鵠樓に登ると光り輝く太陽も、西の山々によりかかるように沈んでゆき、眼下には、滔々と黄河が東の海に流れ続けている。

この雄大な眺めを、千里の彼方まで見極めようとして、更にもう一層上へ登つてみるのである。

### 【語句の意味】

鶴鵠樓 山西省永済県の西南にあつて黄河を望む地に立つ  
えいさいけん

【作者略伝】王之漢（688～742）

盛唐の詩人のなかでは、孟浩然より1年早く、王昌齡よ

り10年早く生まれている。王維、李白よりは13年早く、高

適よりも20年程早い。

しかし今挙げた盛唐を代表する詩人たちと違つて、王之渢は事迹（一生事跡）がよくわかつていよい。清末に「墓誌銘」（亡くなつた人の経歴、事迹を石に彫つて墓の中に埋めたもの）が発見されて生没年が明らかになつた。墓誌銘を書いたのは斬能（きんのう）という王之渢と同時代の人で、その中に王之渢が742年2月14日、文安県の官舎で55歳の生涯を終えたとある。

王之渢は絳県（山西省新絳県）の人で、字は李陵（りりょう）。少年の頃は長安郊外の五陵の地で仲間と群れて酒に耽つたり高歌放吟したりする日を送つていた。やがて、こうした游蕩（放蕩）生活と断絶し、学問と詩作に関心を向けるようになり、ついには同時代の名士たちにも知られるまでに至つた。

のち推されて官に就いたが、性に合わず、長い在野生活（官職に就かない）を送ることとなつた。晩年、再び官に就き文安県（河北省）の尉となつたが間もなく病んで官舎で亡くなつた。詩人としては天才的で一詩が出来上がるごとに樂工（樂師）が節をつけて世に出し、歌曲はもてはやされたといふ。但し現在、作品は六首しか伝わっていない。王昌齡と「忘形爾汝」（われを忘れ、おれ、お前の間柄となる）の交わりをしたと伝えられる。他にも高適とも親しかつたようである。

### 参考① 作者は朱斌か？

今日一般に行われている総集の類では、作者を王之渢としているものが大部分である。いつ頃からかは明らかではないが宋初の『文苑英華』卷312には既に王之渢となつてゐるが、清時代の『全唐詩』には朱斌（しゆひん）であるとする説が記されている。

この詩を収める最も早い総集は『国秀集』（744年頃編纂）という詞華集であり、その中で朱斌の作と記載されている。この詩を載せている本の中では最も古いものである。朱斌も官位のない人であつたといわれる。

今後、新資料の発見や研究が進めば朱斌がこの詩の作者とされる可能性が高いと思われる。

盛唐の時代、複数の詩人の作品を選んだ詞華集が盛んに作られそれを通して作品が読まれ、その結果作者を置き去りにして、作品だけが愛誦されていくという現象が起こつたと考へられる。作者は無名であるのに作品だけが有名になつていくといふ、盛唐の時代には独特な詩の伝播の仕方があつたのではないか。まさに「詩は知られ人は知られず」である。

### 参考② 暢諸の「登鸕鷀樓」詩の紹介

盛唐の暢諸「鶴鵠樓詩」の詩も中唐に高い評価を受けていた。

登鶴鵠樓 暢諸  
迥臨飛鳥上 鶴鵠樓に登る 暢諸  
高出世塵間 迂かに飛鳥の上に臨み  
天勢圍平野 高く世塵の間より出づ  
河流入斷山 天勢平野を囲み  
河流断山に入る 河流断山に入る

### 【詩の意味】

空を飛ぶ鳥よりも高々とそびえたつ楼上から見おろせば、まるで塵世（俗世）の中から抜け出たような爽快な気分である。

ドーム状の広大な天空が、平坦な原野をとりかこみ、黄河の奔流が切り断たれた山の間へと激しく流れこんでいる。

この詩は、鶴鵠楼から望む群山を切り裂く黄河の雄大な流れを詠んだ好詩として伝えられている。王之渙も暢諸も、鶴鵠楼を起点にしたスケールの大きさを表現しているが、王之渙の作品が結句において、より広く知られるようになつた。千里の眺望をきわめようと更に上の階に登るとだけ述べ、そこでの眺望、それを目にした作者の心境については全く触れられていない。それらについては、一切が読者の想像に委ねられているのであるが、これによって作品の味

わいが無限に深められている。

### 参考③

#### 「王之渙の作品として残されている六首」の一つの紹介

九月九日重陽の節句に、旅立つ人を送る詩である。詩の内容から場所は河北の地であり、送られる人は郷里または都へ帰るのであろうことがわかるが、そのほかの事情は明らかではない。それは他にはない侘びしさを感じる詩である。

### 九日送別 王之渙

薊庭蕭瑟故人稀  
何處登高且送歸  
今日暫同芳菊酒  
明朝應作斷蓬飛

### 九日送別

王之渙

薊庭蕭瑟として古稀なり  
何れの處か高きに登りて且く（且つ）帰るを送らん  
今日暫く同にす芳菊の酒  
明朝は応に断蓬と作つて飛ぶべし

### 【詩の意味】

薊州の町には秋風がさびしく吹きわたつて、昔からの友

人もほとんどいない（その一人の君も旅立つて行くのだ）。

重陽の今日、どこで登高の催しをしながら、君の帰るのを見送るとしようか。

今日はしばらくの間、菊の香も高い酒をくみかわしてい  
るが、明日の朝になれば君は根の切れた蓬の身となつて、  
行方も知らず飛び去ることであろう。

### 【語句の意味】

薊州（河北省薊県、北京の東方）

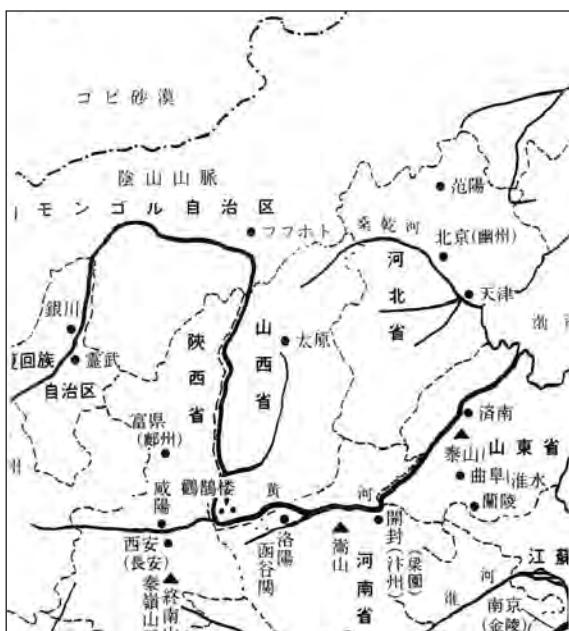
さびしく吹く秋風の形容

昔からの友人

ひとまず

菊花を浮かべた酒

北方に生える蓬は、冬になつて  
枯れると、根が切れ球形のかた  
まりとなつて、風の吹くままに  
ころげて行く。これを断蓬・飛蓬・  
転蓬などといい、行方さだめぬ  
旅人の身の上にたとえられる。



2002年、蒲洲の黄河東岸に修復された七層の塔